様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 ２６ 日現在

機関番号：２３９０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５２０５１４

研究課題名（和文）キナウル語の連体修飾についての研究－とくに修飾語の形態的側面からの分析

研究課題名（英文）A study on modifying structures in Kinnauri: an analysis from the morpholotical view point of attributive words

研究代表者
高橋　慶治（Takahashi, Yoshiharu）

愛知県立大学・外国語学部・教授

研究者番号：２０２５２４０５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　3,700,000円、（間接経費）　1,110,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、キナウル語の修飾構造を分析するものである。キナウル語では、形容詞は名詞に前置され、形態的な変化なく名詞を修飾する。ただし、形容詞は接尾辞-seyAを取って「形容詞が表す性質をもったもの」のような意味を表し、比較の意味を持つことができる。動詞は、名詞を修飾する場合何らかの接尾辞を取り、名詞の前に置かれる。動詞接尾辞には-tsと-tseyAがあるが、その違いは明らかになっていない。-tsの機能は名詞化接辞の一種ではないかと考えられる。
-seyAは名詞にも付加されうるが、-tseyAは名詞には付加されない。このことはキナウル語の形容詞が名詞と同じ特徴を共有していることを示唆する。

研究成果の概要（英文）：(`A' in Kinnauri words expresses a long vowel.)
This study aims to analyze the modifying structures in Kinnauri. In Kinnauri, an adjective is put before a noun and can modify it without any morphological change. An adjective, however, can take a suffix, -seyA. An adjective with the suffix -seyA means like `something with the quality expressed by the adjective', and can have comparative meaning. In the case of a verb modifying a noun, the verb takes some forms and is put before a noun. One of verb suffixes is -ts, which is thought to be a kind of a nominalizer, but the function of which is not clear. Another suffix is -tseyA, which is similar to the adjective suffix -seyA. We do not know the difference in meaning between a verb with -ts and a verb with -tseyA.
The suffix -seyA can be attatched to a noun, but -tseyA cannot. This suggests that Kinnauri adjectives share similar characteristics with nouns.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学

キーワード：キナウル語　チベット・ビルマ語　西ヒマラヤ諸語　連体修飾　動詞　形容詞　状態性

1. 研究開始当初の背景

(1) キナウル語は、インド北西部のヒマーチャル・プラデシュ州キナウル地区で話されている言語である。話者人口は 5 万人足らずであり、文字を持たず、学校教育ではヒンディー語、英語などを媒介とし、子供たちは家庭や友達同士でヒンディー語を使うため、今後急速に使われなくなる可能性がある。

(2) キナウル語は、20 世紀初頭に出版された *Linguistic Survey of India* に掲載された記述およびそれに関連する論文が発表されたが、その後研究は進まなかった。1980 年代後半になって文法書が著されたが、不十分な点が多く、詳細な研究が求められていた。

(3) 私は、本研究開始までに、キナウル語の記述研究を行い、とくに名詞および動詞の形態変化を中心に研究し、動詞の接辞体系や、形態統語的な文構造として能格的な構造があることなどを明らかにしてきた。その中で、動詞の動作主体が属格で表される場合があることについて考察を進めようとしたが、その考察のためには、この構文で現れる動詞接尾辞 *-seyā* と、それに類似する動詞接尾辞 *-tseyā* について十分な資料がなかったため、これらの接辞を詳細に分析する必要があった。

(4) これらの接尾辞が動詞だけではなく、名詞や形容詞にも付加されることから、この時までに十分に記述していなかった形容詞および修飾構造を記述すべきであると考えた。

2. 研究の目的

(1) 上記のように、接尾辞 *-seyā* と *-tseyā* の違いを明らかにし、形容詞および修飾構造を記述することを目的とする。

(2) また、修飾構造の観点から、キナウル語の動詞、形容詞、名詞が連続性を持っていることを示す。

3. 研究の方法

(1) 研究は、現地調査により該当の資料を収集し、分析することによって行われた。

(2) また、関連文献を精査し、他の言語での形容詞の性質などを調べた。

4. 研究成果

(1) キナウル語では、形容詞は、形態変化することなく名詞を修飾することができる。

nugō	*tsoik*	*diṅ*	***dam***	***zōlā***
3PRN:PL	all	place	good	bag

dū
exist

'They have a good bag with each of them.'

(2) ただし、形容詞が *-seyā* という接尾辞を取ることがある。この場合、それが連体修飾として使われている場合も、叙述的に使われている場合も、形容詞は比較級に相当する意味を持つことができる。*-seyā* という接尾辞は、形容詞に付加されて、「その形容詞が表す性質を持つもの」のような意味を持っており、2 つ以上のものの中で、とくにその性質を持ったものという意味になるため、比較級の意味が生じると考えられる。

gɨ.s	*jū*	*kā*
1PRN:SG.INS	this:GEN	than

dam/dam.seyā	*gasā*	*zog.im*
good/good.ATTR	clothes	buy.INF

gyā.to.k
want.FUT.1S

'I want to buy clothes better than this.'

キナウル語では、とくに比較級にしなくても文脈で比較の意味が明らかであれば、そのように理解される。しかし、上の例の *damseyā* のように *-seyā* を形容詞に付加すれば比較の意味がはっきりする。

(3) 動詞は、通常そのままでは名詞を修飾できない。そこで、*-tseyā* または *-ts* という接尾辞を取るか、重複形にして、名詞に前置

することによって、名詞を修飾する。

hunak.staṅ ***ma.krab.tseyā*** *c^{h}aṅ*
now.till NEG.cry.ATTR boy

hunā *krab.udū*
now cry.PR

'The boy who didn't cry till now is crying now.'

上は、動詞語幹 *krab-* に *-tseyā* が付いている例である。

(4) *-tseyā* と *-ts* の違いは、今のところ明らかになっていない。ただし、どちらか片方のみが使える場合があるので、何らかの意味の違いがあると考えられる。この違いについては、今後の課題である。

nu *ts^{h}ar.ši.**d**/ts^{h}ar.šid.**tseyā***
that make_dry.MDL.GRD/make_dry.MDL.ATTR

gasā *ka.ň*
clothes bring:1-2o.2s

'Bring those dried clothes.'

上の例で、*ts^{h}aršid* の末尾の *d* は、中動態接辞 *-ši* に後続する場合の *-ts* の異形態である。

(5) *-ts* は、他の分布から見て、名詞化接辞の役割を果していると考えられる。

(6) 動詞には、*-tseyā* を付けることができるが、*-seyā* を付加することができない。逆に、形容詞には、*-seyā* を付加することはできるが、*-tseyā* を付けることはできない。

(7) また、*-seyā* は名詞に付加することができる。この点から、キナウル語の形容詞は、名詞的な性質を持っていると考えることができる。

(8) *-ts* が名詞化接辞であり、*-seyā* が名詞に付くのであれば、*-tseyā* は *-ts* に *-seyā* が付いていると見ることができる。ただし、このことは十分に確定できる証拠はない。

(9) なお、動詞に *-seyā* が付加されていると見える例があるが、それは動詞語幹に直接付加されているのではなく、動詞語幹と接尾辞 *-seyā* の間に *-mig* が挟まれている。この *-mig* は、現在準備中の論文「キナウル語動詞の非定形について」で派生不定詞と呼んでいるものであるが、動詞を名詞化する機能があると考えられる。

šālū.pɨṅ *bārī* ***huši.m.ig.seyā***
PSN.DAT very study.INF.OBLG.ATTR

(dū)
COP

'Shalu has to study much more.'

(10) なお、修飾構造を考えるとき、関係節についても考察が必要であるが、この課題で考察の対象となっている修飾構造とは違いが大きいため、対象としなかった。したがって、関係節については、今後の課題である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 2 件）

Takahashi, Yoshiharu,
'On a middle voice suffix in Kinnauri (Pangi dialect)', In Wataru Nakamura and Ritsuko Kikusawa eds., *Objectivization and Subjectivization: A Typology of Voice Systems*, Senri Ethnological Studies 77, Osaka: National Museum of Ethnology, pp. 157–75, 2012. 査読有.

高橋 慶治,
「キナウル語（パンギ方言）の時制接辞について」『地球研言語記述論集』4, 京都: 言語記述研究会（総合地球環境学研究所インダスプロジェクト）, pp. 1–12, 2012. 査読有.

〔学会発表〕（計 2 件）

Takahashi, Yoshiharu,
'On the usage of *-tseyā* and *-seyā* in Kinnauri' 17th Himalayan Languages Symposium (6–9 Sept., 2011), Kobe, 8 September, 2011.

高橋 慶治,
「キナウル語の名詞句構造と修飾構造」TB 諸語における「名詞句と修飾構造」第 2 回研究会、京都大学人文科学研究所、2013 年 12 月 1 日

〔図書〕（計 2 件）

Takahashi, Yoshiharu,

Sections 3.1.10, 3.4, 4.1–4.2, In Toshiki Osada and Masayuki Onishi eds., *Language Atlas of South Asia*, Harvard Oriental Series: Opera Minora No. 8 ed. by Michael Witzel, Cambridge: Department of South Asian Studies of Harvard University, 2012. 総 164 ページ. 査読有.

高橋 慶治,
「キナウル語の述部構造について」澤田英夫（編）『チベット＝ビルマ系言語の文法現象 2: 述語と発話行為のタイプからみた文の下位分類』東京: 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, pp. 203–24, 2013. 総 330 ページ. 査読有.

〔その他〕

なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

高橋 慶治（TAKAHASHI, Yoshiharu）
愛知県立大学・外国語学部・教授
研究者番号: 20252405